

(特別講演)

土 木 史 的 に み た 京 都

立命館大学教授 文学博士 林 屋 辰三郎

奠都前の京都は、5世紀に日本に帰化した秦氏によって、大規模な開発が行われた。もともとこの盆地には、西北より桂川、北方より賀茂川、東北より高野川が流入して、一大氾濫原を形成していたが、秦氏の活動によって、まず桂川に大堰が設けられて、西部の開発が行われた。その氏族の根拠地として、太秦、深草が早く知られ、その後、高野川の流域を挟んで、北野、八坂の地域に、中心がつくられるようになった。この北野、八坂の二つの地域が、京都を形成する前提となった村落である。

京都すなわち平安京の造成に当っては、まず高野、賀茂両川をつくる氾濫原の整地が必要であったので、新しく上賀茂から下賀茂に至る通水路をつくって高野川につなぎ、さらに現鴨川になる通水路をもって河水を南流させた。ここにおいて現在の堀川の線の流れていた旧賀茂川は完全に減水し、高野川もまた鴨川に流入して、中部に市街地がつくり出されたのである。

平安京を設計する際の原点は、北にある舟岡山の頂点で、それから南行の直線をもって朱雀大路とし、東の吉田山と西の双ヶ丘（一ノ丘）の頂点を結んで一条大路（北界）を決定した。現在も舟岡山の頂上には、荘厳をきわめた磐座（いわくら）があり、古代信仰の跡を物語っている。

京都はいうまでもなく唐制の都城にもとずいており、その特徴はすべて朱雀大路を中心に、正確な左右相称であることで、均斉の美を第一としていた。こんにちにのこの遺跡としては、その意味で東寺の存在が、最も重要である。それとともに、新しく開鑿した河川としての賀茂川と、旧賀茂川の遺跡を整備した堀川とは、これまた京都にとって草創期を物語る歴史的記念物である。

その後、京都はる回にわたって廃都となる危機を経験した。1は治承寿永の内乱期であるが、その場合には政治的都市から、宗教都市に転換することによって復興した。禅、浄土、法華の諸寺院が、壮大な建築を示しはじめるのはこのときである。東福寺のごときは、東大寺と興福寺を兼ねるところに、その命名の意味があった。

2は応仁文明の大乱期で、このときは商業都市として西陣機業を中心に、町衆の手によって再興した。それとともに秀吉のもとで、平安京の創始に対応するような土木的変更が加えられた。御土居の設置、短冊型の町割、寺町、寺ノ内の形成がそれである。また角倉了以による高瀬川の開鑿は、江戸に中心が移ったあとの京都の復興のため、大坂－伏見－京都を結ぶ動脈の役割を果たしたものであった。

3はいうまでもなく明治維新であるが、そのあとには近代化の方策がうち立てられ、先進的なうごきを示すようになる。琵琶湖疏水計画などは、その第一に推すべきものであろう。

京都はこのようにつねに開発と保存が、きわめて調和した形で進行していた。この二つは矛盾するものでなく、調和すべきものであるが、その媒介をなすものは、ほかならぬ文化であることを強調しておきたい。